

平成26年度「JA青年組織手づくり看板全国コンクール」審査講評

全国農協青年組織協議会が主催する平成26年度「JA青年組織手づくり看板全国コンクール」には、全国32都道府県から83作品（看板部門68点、アート部門15点）の応募があり、平成27年1月15日（木）に東京・大手町のJAビルで審査委員会を開催しました。作品募集テーマは昨年同様「農業のある地域づくりの大切さに関する地域住民へのアピール」とし、インパクト（設置場所選択を含む）、内容、デザインなどの審査基準に基づき審査を行いました。

なお、審査委員は、全国消費者団体連絡会、JA全農、JA共済連、農林中央金庫、日本農業新聞、家の光協会、農協観光、JA全中の各団体からお集まりいただいた広報担当の職員など8名の委員で審査を行い、審査委員長は互選により、全国各地の青年部活動取材し、記事として取り上げていただいている雑誌『地上』の編集長である山本樹氏が選ばれました。

審査の結果、最優秀賞には「みやぎ仙南農協川崎地区青年部（宮城県）」の作品が選ばれました。圧倒的なインパクト・メッセージの分かりやすさによって、地域ブランドである「仙台牛」を地域の消費者に“食べてもらいたい”という思いが強く伝わってくる作品です。審査委員が口々に「お肉が食べたくなった」と漏らすほど、素人離れしたあかぬけたデザイン、看板としての視認性など、地域の誇りとなる食ブランドを訴えるツールとして看板を最大限活用した完成度の高い作品であり、「農業ある地域づくり」を地域住民にアピールするというコンクールのテーマにも即していることから、最優秀賞に相応しい作品と多くの審査委員から評されました。

アート部門賞には「JA鳥取いなば福部青壮年部（鳥取県）」の作品が選ばれました。「決めだまはなしとらつきょう」という力強いメッセージと砂像のデザインが、鳥取らしさを強調しており、地域性と青年部の手づくり感が前面に出たアート部門らしい作品です。JAのATMのそばに設置しているということで、地域農業のサポーターである准組合員に対しても、自信を持って特産品をPRする気持ちが前面に出ている作品であり、アート部門賞に相応しいと評価されました。来年度に向けて、「もう少し大きな分かりやすいデザインの作品を」との激励の声が審査委員からは挙がりました。

（各特別賞について）

○ 全国消費者団体連絡会賞「JAいなば青年部（富山県）」

農業女子のイラストが「なくしたくない！私のふる里」というメッセージに上手く合っており、全国消費者団体連絡会の小倉氏からは「若手農業者の農業への思いが爽やかに伝わってくる。」と評され、広く地域の方々に農業の大切さを訴求できている点が評価されました。

○ J A全農賞「J Aめむろ青年部 上伏古支部（北海道）」

大手飲料メーカーの缶コーヒーのデザインにもなり地域住民なら誰もが知っている風景をあえて描くことで、思わず地域の方々が目に留めてしまうデザインとしている意匠上の戦略と、「百年さきもこの景色」というメッセージの一体感が評価されました。

○ J A共済連賞「J Aくま青壮年部（熊本県）」

スマートフォンで地域の水田の写真を切り取るというデザインが、地域の若い人にも訴求できるデザインとして評価されました。構成を工夫しスマートフォンのフレームを活用することで、未来へ残したいという水田の風景が際立っており、盟友の思いが伝わる作品です。

○ 農林中央金庫賞「J A福井市南部青壮年部連協（福井県）」

「おかわり！」という子供の声が聞こえてくるような作品であり、見る人を選ばない分かりやすいデザインが評価されました。地元産のお米のおいしさを自信を持って伝えようとしている若手農業者の思いが消費者に伝わる作品と評されました。

○ 日本農業新聞賞「J A三次青壮年連盟（広島県）」

「MADE IN JAPAN」というメッセージの中に、世界に誇れる農畜産物を生産している地元の農業を地域住民に知ってもらいたいという盟友の思いが伝わってくる作品です。優れたデザインとあわせて、輸出拡大という時節を捉えた話題を上手く活用している点が評価されました。

○ 地上賞「J A会津いいで青年部（福島県）」

イラストの高い完成度と、黄金色の稲穂の風景を子供に伝えたいという盟友の思いをコンパクトにデザインできている点が評価されました。来年度に向けて、「この青年部の大きな作品が見てみたい」との激励の声が審査委員からありました。

○ 農協観光賞「J Aあまみ青年部 和泊支部（鹿児島県）」

地元のAコープの店舗内に約2m×3mと屋内としては大きな看板で若手農業者が青年部の活動をスタートさせたことをPRしており、青年部の結成と地域農業のために頑張っている盟友の姿を看板というツールを上手く活用して地元住民へ訴求している点が高く評価されました。

○ J A全中賞「J A高知はた青壮年部 大月支所（高知県）」

若手農業者が地域農業を支えていく上で直面している課題をシンプルに訴えている点が、これまでの看板作品と大きく異なり、見る人を立ち止まらせる作品となっています。シンプルでありながら、地域の農業を考えてもらうきっかけになるような作品であると評されました。

(総評)

今回のコンクールに寄せられた作品も、その一つ一つが個性的で、地域の状況をしっかりと踏まえながら制作されていました。毎年、デザインのレベルが高くなっており、制作に携わった盟友の熱い思いがひとつの看板に集約されていることが伝わってきました。

昨年に続き、本年度も、デザインに秀でた作品が多く、作品を制作するにあたって優良事例を研究され、思いが伝わりやすいようにとの工夫が分かりました。受賞作品から分かる通り、青年部内で意見交換を行い、何を訴えるかとあわせて、デザインについて一工夫した過程の見える作品が、訴求効果の高い作品と評価されることが多いようでした。

メッセージ(標語)に関しては、長すぎて訴求効果が低い作品が見受けられ、受賞を逃した作品もありました。また、メッセージの文字色について、「“後退色”ではなく“進出色”とすべき」と指摘された作品が多く、進出色をメッセージに使うために、事前に背景の色について検討した上で作品制作に取りかかってほしいとの声がありました。

また、作品そのものの大きさについても、遠くからの視認性や設置場所との調和等の観点から、小さすぎると判断された作品も複数ありました。盟友全員で製作作業に取りかかったことが伝わってくるような、大きな作品を来年度は期待したいと思います。

審査では、看板部門・アート部門にかかわらず「メッセージをどのように伝えているか」という点が最大の評価ポイントとなりました。本コンクールのテーマは「地域住民へのアピール」であり、広く地域住民が目にする場所に設置されていることが第一のポイントになります。その意味でも、来年度は作品の遠景写真を必ず提出していただきたいと思います。

さらに、背景については地域の誰もが知っている風景とするなど、地域住民が共感できるデザインかどうか、メッセージについては青年部内向けではなく外に向かってどのようなメッセージを発信しているか、などが受賞の決め手となりました。

今回応募があった作品の一枚一枚の看板が、地域住民に食と農業への理解を深めてもらうきっかけとなることを何より願っております。さらに、多くの盟友が関われる看板制作というイベントを通じて青年部の結集が今後ますます強まることと信じております。

今後も本コンクールの開催が看板制作の励みになること、そして青年部の看板が全国各地に建てられ、日本農業の情報発信源となり続けると確信しています。

【審査委員】(敬称略)

山本樹<審査委員長>(家の光協会・編集本部地上編集部 編集長)、小倉寿子(全国消費者団体連絡会・政策スタッフ)、北里清和(全国農業協同組合連合会・広報部 部長)、水谷彰男(全国共済農業協同組合連合会・総務部事業広報室 課長)、木村吉弥(農林中央金庫・総合企画部 広報担当部長)、遠藤益功(日本農業新聞・広報局 副局長)、浅井好広(農協観光・執行役員 旅行事業部 部長)、樋口直樹(全国農業協同組合中央会・広報部 部長)